

すいはく 博物館 だより

No.48

平成23年度 吹田市無形民俗文化財指定記念展示

どんじ祭り —古式を伝える祭祀—

平成23年(2011年)10月22日(土)～11月27日(日)



神社に奉納された神饌（南地区）



稚児（小路地区）



行列（東地区）



南・小路・東地区の幟

どんじ祭りは吉志部神社の秋祭りで、神社祭礼の古い形態が残され、平成23年（2011年）4月に吹田市の無形民俗文化財に指定されました。祭りの主な内容は糯米を蒸した白蒸しや小判餅（牛の舌餅）、茄子、栗、柿を刻んで串にさした菓子といわれる三種類のお供えを作り、神社へ奉納することです。また、若い少女が神社へお供えを奉納し、祭りにおいて重要な役割を果たします。少女は特殊ないでたちで神へ仕える巫女の性格を負い、神社の裏にある釈迦ヶ池に住む大蛇への人身御供の名残であると伝えられています。

本展示では指定を記念して、近隣の類似の祭りもまじえながらどんじ祭りを紹介します。

どんじ祭り

どんじ祭りは吹田市岸部に鎮座する吉志部神社の秋祭りで、10月17日に岸部の小路・東・南地区においてほぼ同じ内容で行われます。古いお祭りの形を残すもので、平成23年（2011年）4月11日に吹田市無形民俗文化財に指定されました。お祭りがいつから行われるようになったかは不明ですが、小路地区に伝わる元禄8年（1695年）の文書には現在伝えられている祭祀の内容とほぼ同じ祭具やお供えの材料が記載されています。また、江戸時代の記録では祭日は旧暦9月1日で8月25日が「御口明」といわれ、神社へ手作りの濁酒と散米を奉納して祭りの準備にとりかかりました。

かつては各地区でお祭りをを行う家は限られており、その集団を小路、南地区では頭人仲、東地区ではどんじ講といました。

お祭りはその集団から毎年決められた当番が中心となってとりおこなわれました。当番のことを頭家といいます。小路では1月10日に「頭家勘定」が行われ、前年の頭家の家に頭人仲が集まり、料理が振る舞われ、新らたな頭家にお祭りに使われる道具等が申し送られ、頭家の1年間が始まりました。頭人仲には共有する田（頭田）があり、頭家は田を耕作してお祭りの費用にあてたり、収穫物を神様へのお供えに使用しました。耕作にはすべて男子があたり、下肥は使用しなかったといえます。夏の土用には池で真菰を刈りとりきれいに洗って陰干しし、祭具に用いました。また、頭家は祭りの1か月前から家族とは別室で寝起きし、潔斎の生活に入りました。

お祭りの前日の宵宮には、頭人仲は風呂に入って身を清め、紋付き袴で頭家の家に集まり、「主食」とされる頭田で収穫された糯米を蒸した白蒸し。副食とされる小判餅と菓子の3種類のお供え物を作ります。お供えを調製するかまどの近くの柱にはカマヘイという御幣をたて、神官がお祓いをしました。

白蒸しは頭と呼ばれる丸い木の台に割竹を円柱や円錐状に立て、上部に盛った白蒸しを置き、かわらけで蓋をします。小路地区ではさらにその中に半紙と真菰で包んだ四角に固めた白蒸しを入れ、竹の柱を真菰で巻いていきます。東地区では講員は紺木綿で日の丸の扇と「講中」の文字を染めぬいた前掛けをして調製し、白蒸しができあがると「ドンジノー」と叫びました。白蒸しは小路、南地区では8つ、東地区では7



白蒸しの調製（南地区）



白蒸しの調製（小路地区）



前掛け（東地区）

つ作られます。

副食の小判餅は平木に小判の形をした餅をならべ、平木^{へぎ}の数は小路地区では9枚、東と南地区では12枚用意されます。小路地区では小判餅が7個と中央に花餅という丸い小さな餅を2個花びらのように配置し、南地区では小判餅を牛の舌餅ともいいます。



小判餅の調製（小路地区）

菓子は皮のまま賽の目に切った茄子、栗、柿と花餅を竹串に刺して藁束に立てます。小路地区では小さなわら束が9つ、東、南地区では大



菓子の調製（南地区）



頭家の座敷に供えられた神饌（南地区）



頭家の座敷に供えられた神饌（東地区）

きなわら束1つが作られます。菓子は木の枝に花が咲いた様を表し、小判餅の花びら様の配置とともに正月の餅花のように豊作を願う気持ちが表れています。お供えはできあがると頭家の座敷にしつらえられた祭壇に供えられ、東地区では厨子に入った神像も祀られます。頭人仲^{とうにんちゆう}は一旦各家に戻り、再び頭家の家に集まり、膳が振る舞われます。南地区では白蒸しのおにぎりが出され、神に供えられた主食と同じものを食べることで神と人の共食がおこなわれています。

同じ日、頭家の家の門口には幟^{のぼり}が立てられま



神社に向かう行列(南地区)

す。幟^{のぼり}は竹竿の先に日の丸の扇を一本付け、その下に開いた三本の扇を円形にして取り付け、扇の要に紅白の和紙に米や小豆を包んで結び付け、その下にはさらし布のフキナガシと長い御幣^{ごへい}が付けられています。幟^{のぼり}は頭家^{とうや}の家であることを標示するとともに神様を招き下ろす古くからの作法で、近畿を中心とする西日本で当屋祭祀の祭場に立てられるオハケの一種です。頭家の家に神を迎え、供物を供える点に神社を中心に行われる儀礼にくらべ、より古い祭祀の形態がみてとれます。



頭屋の軒先に出された幟（東地区）

また、東地区では青年が大しめ縄を作り、村中を担いだ後、名次宮^{なづきのみや}の鳥居に掛けました。

祭礼当日は南、小路、東地区の順に時間を変えて行列を組んで幟^{のぼり}とお供えを神社へ運び、神前に供えます。そのため南地区が朝食、小路地区が昼食、東地区が夕食といわれています。出発に際し、小路では黒砂糖の汁に浸した水餅を振る舞い、近所に小判餅2個、花餅1個を和紙に包み2両1分の金子にみたてた餅が配られま

した。

小路地区では提灯、幟^{のぼり}、頭家^{とうや}、稚児^{ちご}、副食（小判餅と菓子）が入った神饌箱、主食（白蒸し）が入った唐櫃の順に並んで神社に向かいました。道中、幟^{のぼり}につけられたフキナガシで道筋をお祓いしていったといわれています。神社に到着すると幟^{のぼり}は社殿の柱にくくりつけられ、お供えは神前に奉納されます。

行列に小路、南地区では稚児^{ちご}が加わります。稚児はお供えを神前に奉納する役割をもっており、最も重要な役割でした。古くにはお供えは宵宮に運び、稚児は終夜神前に仕えたといえます。



行列の稚児（小路地区）

小路では稚児^{ちご}は4人で、初潮前の希望者から選ばれ、前日から頭家^{とうや}の家で風呂に入り布団の下に真菰^{まこも}を敷いて寝ることになっていました。また、稚児^{ちご}になるとお産が軽くなるともいわれていました。稚児は髪を奉書紙で束ね、サンドラという御幣^{ごへい}がついた藁製の輪をかぶり、木綿の梅の裾模様の萌黄色の着物にしめ縄の帯を締め、かかとの部分に2つの輪が尾のように出た特殊な草履をはきます。サンドラは形態が棧^{さん}俵^{だわら}に似ていることから命名と考えられ、かつて神饌を頭上運搬するのに用いられてきた輪が、お供えが箱や唐櫃で運ばれるようになり、現在のような形になったものと考えられます。同様の民俗には近辺では大阪市西淀川区野里の住吉神社の一夜官女^{いちや かんじょ}、西宮市鳴尾の岡太神社の一時上臈^{いっときじょうろう}が知られています。

尾が出た草履も各地の祭礼で重要な役割をも

つ聖なる者がはくかかとの部分を最後まで編ま
ずに作られたゲゲといわれる草履の一種である
ことがわかります。こうした稚児^{ちご}の行為や特殊
な衣装には、稚児^{ちご}が神に仕える巫女で神聖な存
在であることを物語っています。

稚児^{ちご}には由来が伝えられています。昔、神社
の裏にある釈迦ヶ池には大蛇が棲んでおり、毎
年祭になると、村の娘を大蛇の人身御供に出
すことになっていました。ある時、領主の吉師
俊守が池に馬を洗いにいった折、馬の足にま
わりついた小蛇を斬り殺したところ、雷鳴が鳴
り響き、池の水が真っ赤に染まり、池には退治
された大蛇の姿がありました。その後、人身御
供はなくなりましたが、稚児^{ちご}はその名残と伝え
ています。また一説には岩見重太郎^{ひひ}が狒狒^{ひひ}を退
治したともいわれています。そのため、稚児^{ちご}は
出発に当たっては別れの盃が取り交わされまし
た。



別れの盃（小路地区）

同様の話が小路地区^{とうにんちゅう}の頭人仲であつた吉志家^{きし}
の邸内にあつた小祠の板壁にも記されていま
す。そこには岸部の里と四天王寺内の三宝寺の
間の九瀬の淵には悪鯉龍がおり、人々をなやま
していましたが、岸部に住む難波の吉師の末裔
である吉志俊守が森の後の淵（釈迦ヶ池）で悪
鯉龍を退治して、末社に納めたことが祭礼の始
まりであるとされています。九瀬の淵とは淀川、
神崎川の兩岸の低湿地帯であり、近年まで洪水、
排水に悩まされてきた地帯でした。里人をなや
ます悪鯉龍とは水害をもたらす荒ぶる水神を象
徴し、悪鯉竜（大蛇）を退治し、社に鎮め祀る



旧吉志邸にあつた小祠内の鯉竜図

ことは、荒ぶる水を制圧し、人の力で制御でき
る水源であるため池が整備され、岸部の地が開
発されたことを伝えています。

どんじ祭りは蛇祭りともいわれ、この日は必
ず雨が降ると伝えられています。祭りをを行うこ
とは祭礼の始原である鯉竜退治を再現するもの
であり、水神により農業用水となる恵みの雨が
もたらされていることになります。

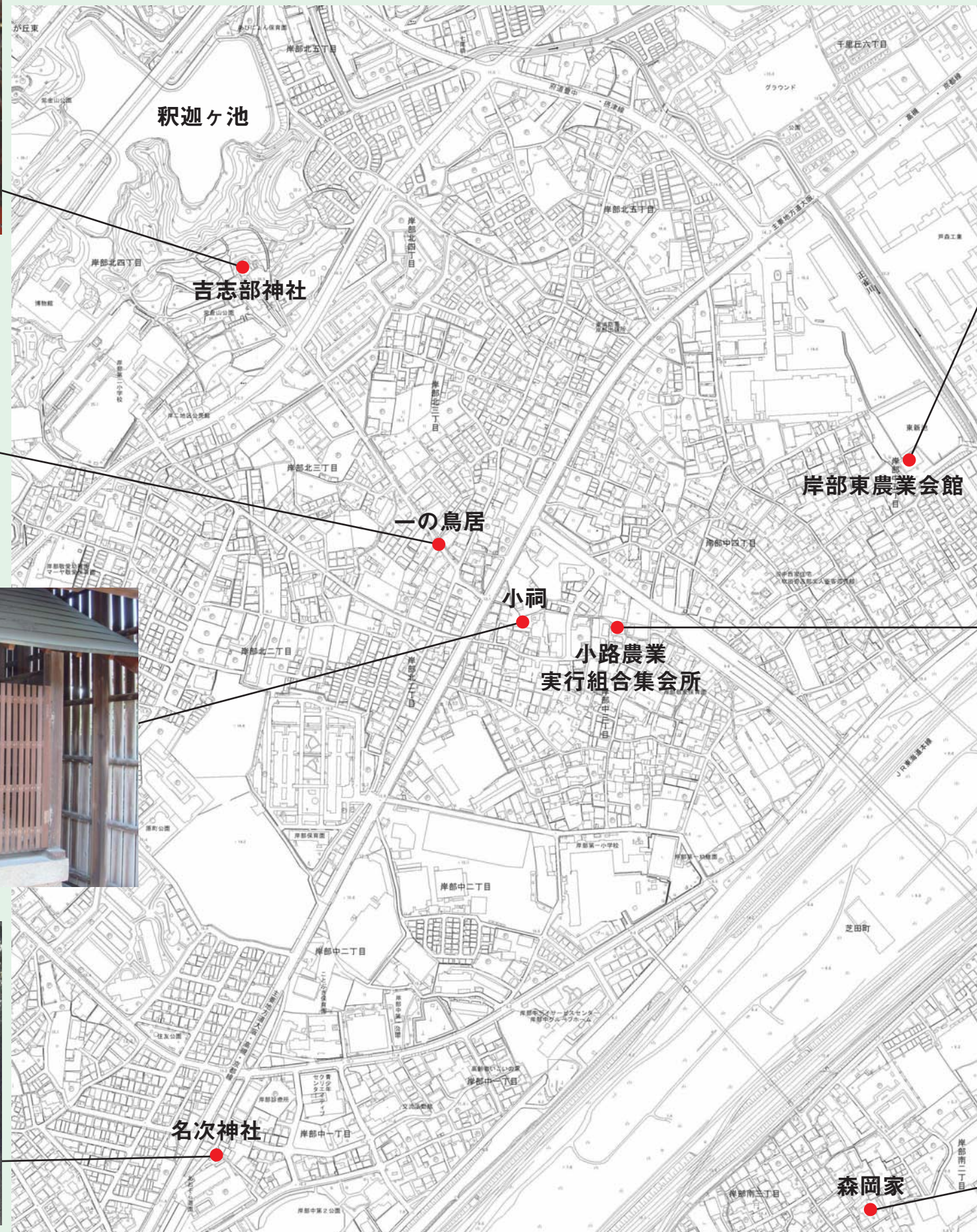
どんじの名称は、平安文学にも散見している
強飯を卵形に握り固めた「屯食^{とんじき}」が転訛したも
のといわれています。白蒸し^{しらむ}を丸くした「屯食^{とんじき}」
を神様にお供えするのが祭りの最大の主眼であ
つたためにこの名がつけられたものと思われま
す。

また、古くは神社で轆^{のほり}につけていた小豆を小
正月まで残し、小豆粥を炊き、葦^{あし}の茎の輪^{かゆ}を粥
の中にいれ、入った小豆と米の量でその年の豊
凶を占う粥占^{かゆうら}神事に使用されました。占いの結
果を見るために三島地域全域から人が集まった
と伝えています。

現在、お祭りは吉志部神社どんじ保存会によ
って伝承され、守られています。

藤井裕之（当館学芸員）

どんじ祭り関係地図



いち や かん じょ 一夜官女とその周辺—淀川河口部地域の民俗文化

一夜官女祭は、毎年2月19日・20日に大阪市西淀川区野里の住吉神社で行われる祭りです。江戸時代には旧暦1月に行われ「野里の一夜官女」として、数々の地誌や錦絵などの絵画作品で紹介されるなど、大坂の周辺村落としては非常に有名な祭りでした。

現在の行事は19日に氏子の男性たちが調製したコイ・フナ・ナマズなどの神饌を入れた小判型の夏越桶を、20日に7人の官女と称される少女たちが、侍役の父親、母親とともに住吉神社に運んで祭儀を執り行ないます。現在は野里・姫里・歌島の3地区の氏子の人々により奉仕されますが、かつては定まった家で組織される宮座の祭りでした。

この祭りには人身御供の伝承があり、白羽の矢が立った家の娘が悪神の生贄にされ、英雄・岩見重太郎が身代わりとなり、悪神の正体である狒々を退治する伝説が伝えられています。神事はそれを具現化するように、祭りの当番を



わかれ
訣別の盃



官女、侍（父親）、母親と夏越桶が1組となり神社へ

「当矢」と表記し、官女の訣別の盃の儀があり、官女たちは神前に供物とともに供えられます。この一夜官女の人身御供伝承は、司馬遼太郎の短編小説『一夜官女』のモチーフにもなっていますが、岩見重太郎伝説が付加されたのは比較的新しい時代のことで、それ以前には悪神は龍であったと伝えられ、神社裏には生贄を捧げた龍の池跡として乙女塚があります。神社の東側の石垣は、明治時代の新淀川開削以前にあった中津川の堤防で、龍の正体は暴れ川であった中津川の氾濫を象徴していると考えられます。

一夜官女祭の神饌の内容は3種あり、大根八角切り、生臭物を入れない壺の膳（精進膳）。式・四・六の膳にはコイの薄身とフナ一尾を入れます。参・五・七の膳にはコイの頭付きの半身とナマズの筒切りの味噌だきを入れ、各膳にモッソウという蕨で巻いた蒸米、鏡餅や小餅、干し柿、柳の枝で作った箸と楊子を添えます。また夏越桶の周囲には御花と称される紅白の御幣を飾り、中央には鶴亀という筒状の飾りを立



壺の膳



式・四・六の膳



参・五・七の膳

てます。昭和50年代まで使用された古い夏越桶には元禄15年（1702）の墨書銘があり、江戸時代中頃には現在と同様の祭りがあったことがわかります。

神饌は祭りの最後にゴンタクロウという汁にして会食します。こうした供物は昔の人々にとってのご馳走であり、それを神に捧げ、共に食すことで、豊穰などを祈願したのです。

野里の淀川対岸、福島区海老江の八坂神社には、女人禁制を守る伝統的な宮座祭祀、御饗神事が今も残存しています。御饗は神饌をさす語で、一夜官女と同様に神饌を調製し供える神事です。現在も行事を



神饌の調製（イナナマス）



御饗神事の神饌

上段左右に龍頭籠、中段中央がイナナマス、下段中央がイナズシ

伝承するのは冬座という宮座だけで、毎年12月13～16日に行われます。

籤で選ばれた座衆が頭屋として行事の当番をつとめ、買い物、米研ぎの儀が済んだ15日の夜には、頭屋の家に座衆が集まり神饌を作ります。神饌は、河口部に多いイナ（ボラの幼魚）の腹に白蒸（蒸米）を詰め込んだイナズシ、イナの切り身を大根の薄切りと刻んだセリの上にのせたイナナマスなど特殊なものがあります。他には白蒸を藁縄に詰めた龍頭籠があり、かつて村落に災いをなした龍をかたどっていると言われます。16日未明には、深夜の町内を八坂神社に行き、神饌を供えます。神饌は、16日夕刻の直会でゴンタク汁という味噌仕立の汁に調理され、座衆たちが会食します。

一夜官女、海老江の御饗の伝承に語られる龍は、荒ぶる水の神、すなわち氾濫する旧中津川の姿を象徴するものと考えられ、この地域の祭りには自然と苦闘する村落の歴史が秘められています。また周辺の鼻川神社（西淀川区花川）の早旦無言の神事、香具波志神社（淀川区加島）の初午大祭にも、河口部で獲れた魚を用いた特殊な神饌が伝承され、祭りの最後にそれらを汁にして直会で食するという形態がほぼ共通しています。これらの祭りはかつて宮座の行事であったと考えられますが、淀川河口部、旧中津川周辺地域には川への畏れを伝説化し後世に伝えるとともに、特殊な神饌をつくる祭りの文化圏が形成されていたとみることもできます。

（大阪歴史博物館学芸員 澤井浩一）



出立ちの膳

宮座の祭り ―供物を捧げる女性たち―

祭という漢字は、両手で持った供物の肉を祭壇に捧げる様子を表すとされる。祭りでは、まず最初に供物を神に捧げ、祝詞や願文を読み上げて芸能を奉納する。神の力で災いや疫病などを取り除いてもらうためには、神を喜ばせるために料理は豪華でなければならず、最高級料理を捧げて神とともに食事をする。

吹田のどんじ祭りも、神に捧げる供物を調理し、それを神社に運んで神前に供える儀礼が祭りの中心となっている。供物の調理は、特定の資格を持った構成員の男性だけで行うが、これは近畿地方を中心に広く見られる宮座とよばれる祭祀組織によく見られる。ところが、供物を神社に運ぶ際には少女が同行している。なぜこの少女が同行するのかという意味を考えるには、他の神社の事例を検討しなければならない。

吹田のどんじ祭りを考えるのに、よく比較されるのは、大阪市西淀川区の野里の一夜宮女祭と西宮市小松市南町の鳴尾いっときじょうろうの一時上臈である。

鳴尾の一時上臈は、岡太神社（別名おかおかだしの宮）の秋祭のことで、赤と白の仙花紙を使って「一時上臈」とよばれる宝冠幣を作る。この神社には、南講と北講にそれぞれ属する家があり、宝冠幣も男女をかたどる2種類を祭りの2日前に作り、神前に3本ずつ納める。



西宮市岡太神社の一時上臈の行列（1983年）

祭りの当日には、2つの講からそれぞれ神酒・鏡餅・白米・柿・柚・柘榴・栗を長持に納め、その蓋の上に宝冠幣を15本さした大きな藁

の輪を載せて神社に運ぶ。

行列は現在出なくなっているが、供物を捧げる儀礼は行われている。北講には、元禄十年（1697）のものなど近世の古文書が残っており、旧9月9日と11日に「かい」とよばれた宝冠幣を納める儀礼が300年以上続いていることがわかる。

文化五年（1808）の『摂津落穂集』（巻2）には、おかしの宮という名前の由来に関わる伝承を記している。

例年祭礼に、社頭に供物を備ふるおとこ、旧例をもつて、其年此村に嫁したる女の衣裳を着用して此使を勤む。衆人うしろに随がひ、手をたゝきて拍手をとり、一時女郎、ア、おかしと云、それゆへおかしの宮といふ、是等も一時上ろうか、一とき女郎なるか。

神社へ供物を運ぶ当番の男性の花嫁衣装を着た姿がおかしいので、人びとが囃し立てたのだという。

春先に行われる御田植祭では、田起しや田植



添田町英彦山神宮・御田祭の飯戴汁戴



阿蘇市一の宮町阿蘇神社・おんだ祭りのウナリ



高島市阿志都弥神社・行過天満宮・弘川祭の御供持ち



大津市樹下神社の御膳持ち



鳴門市宇佐八幡神社・お御供を運ぶ当家の妻

などの農作業を模擬的に行うが、儀礼の途中に女装した男性が昼飯を入れた器を頭上に載せて登場する所がある。福岡県の英彦山では、器の中の御飯を参拝者たちが競って食べ、供物を神と共食する姿がうかがえる。熊本県の阿蘇神社のおんだ祭りでは、ウナリとよばれる女性たちが神輿に同行して供物を運んでおり、もともと女性の役割であったことがわかる。

滋賀県高島市の弘川祭では、当番の家（頭屋宅）を出発する際には、男性が供物を頭上に載せて運んでいる。ところが、神社の鳥居の前で、少女に交代してその頭上に載せ、男性たちが支えて神前に運ぶ。供物を運ぶ役が少女の場合だと、体力的な問題もあり、男性に代わるようになったのであろう。その一方で、大津市山中町では、御膳持ちとよばれる若い女性が、オコワ（赤飯）や神酒・豆腐・ワカメなどを入れた御

膳を頭上に載せ、周囲の男性たちに護られて神社へ往復している。

鳴門市撫養町の宇佐八幡神社では、当家の夫が御幣を運び、妻がお御供とよばれる白蒸のオコワを入れたハンボウとよばれる丸い木桶を頭に載せて神前に捧げる。ここでは若い女性ではなく、主婦が供物を捧げる役になっている。

このような女性が供物を捧げる事例は、全国各地に残っている。上臈は身分の高い女性のことであり、神に供物を捧げる女性が一時だけ神に釣り合う身分となることを意味する。それが若い女性だと人身御供の伝説が発生する要因になったと考えられるが、夫婦で頭屋を勤める場合もあり、本来は男性だけで祭りを行っていたのではなかった姿を伝えている。

（黒田一充 関西大学文学部教授）

『どんじ祭りー古式を伝える祭祀ー』関連イベント

講演会

(無料 申し込み不要・先着120名)

- 11月6日(日)** 午後2時～3時30分
「一夜官女とその周辺」
ー淀川河口部地域の民俗文化ー
澤井浩一氏 (大阪歴史博物館学芸員)
- 11月13日(日)** 午後2時～3時30分
「宮座の祭りー供物を捧げる女性たちー」
黒田一充氏 (関西大学文学部教授)

歴史講座

(無料 申し込み不要・先着120名)

- 10月23日(日)** 午後2時～3時30分
吹田市無形民俗文化財になった
吉志部神社の「どんじ祭り」
藤井裕之 (当館学芸員)
- 11月26日(土)** 午後2時～3時30分
水辺の祭祀ー宗教考古学の視点からー
小山修三 (当館館長)
高橋真希 (当館学芸員)
- 11月27日(日)** 午後2時～3時30分
水神祭祀からみた吉志部神社と
「どんじ祭り」
西本安秀・藤井裕之 (当館職員)

展示解説

(当館学芸員)

- 10月22日(土)** 午後2時～2時30分
11月19日(土) 午後2時～2時30分

展示室クイズ

(景品あり)

- 10月22日(土)** 午前10時～午後4時
11月19日(土) 午前10時～午後4時

おでかけイベント

(無料)

- ★10月17日(月)** 午前9時30分～11時30分
どんじ祭りの神饌奉納見学
定員30名 多数抽選
申込締切 10月10日(祝・月) 必着
- 10月29日(土)** 午前10時～12時
紫金山公園の野草探索2
西本安秀 (当館職員)

定員先着50名

集合博物館講座室 雨天決行

コンサート

(無料 申し込み不要・先着120名)

- 11月5日(土)** 午後1時30分～3時
秋のコンサート (紫金山グリーン合奏団)

子ども向けイベント

(無料)

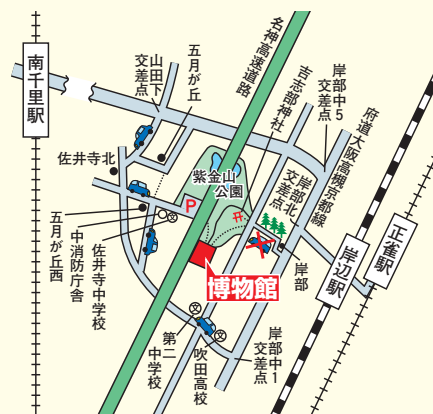
- ★10月30日(日)** 午前10時～12時
午後1時30分～3時30分
おもちゃを作って楽しく遊ぼう
(心ふれあいSAすいた おもちゃづくり部会)
定員各30組 多数抽選
申込締切 10月18日(火) 必着
- ★11月12日(土)** 午前10時～12時
午後1時30分～3時30分
石ころアート (吹田イラストレーター育成塾)
定員各30名 多数抽選
申込締切 10月31日(月) 必着
- 11月23日(祝・水)** 午後2時～3時
(申し込み不要・先着120名)
岸部の民話の読み語りと紙芝居
(朗読工房・吹田高校演劇部)

北大阪ミュージアムネットワーク事業

- ★11月3日(祝・木)** 午前10時～午後4時30分
秋の北大阪ミュージアムバスツアー
(無料・昼食持参)
(吹田市立博物館・今城塚古代歴史館・
島本町立歴史文化資料館の観覧・解説付き)
定員35名 多数抽選
申込締切 10月24日(月) 必着

★印のイベントは申込が必要。はがきまたはFAXでイベント名、日時、名前、住所、電話番号を書いて博物館へ

アクセスマップ



●開館時間
午前9時30分～午後5時15分

●休館日
祝日を除く月曜日と祝日の翌日
12月29日～1月3日

<http://www.suita.ed.jp/hak/>

吹田市立博物館だより 第48号
平成23年(2011年)10月7日発行
吹田市立博物館
〒564-0001
吹田市岸部北4丁目10番1号
TEL.06 (6338) 5500
FAX.06 (6338) 9886